五月三日の会通信

号外

瀬口さんを悼む――滝沢克己

1. II. 1974

瀬口さんを悼む

滝沢克己

一

瀬口さんと始めて知りあったのはいつのことか、覚えがない。九大の教養部と文学部は遠く離れて、どちらも福岡の町外れにあるので、一九六八年六月二日（米軍ジェット戦闘機の電算機センター墜落）以後というだけは確かである。たぶん、工学部本館の応用理学、亡くなった金原さんの個室でのことであろう。

それ以来、封鎖中の教養部自主講座、応用理学の会議室、近くの松源寺や現地柳川での伝習館の集まり、市中の宿を借りての、大学変革研究者会議、教養部本館裁判の準備会の席や地裁法廷など、――背の高い瀬口さんの温顔はいつもそこにあった。時には岡山の人事院審理の場や神戸の法廷に出かける無理をさえ辞さなかった。それが、去年の三月三、四日、玉名で開かれた伝習館三周年の準備会に行ってみると、しばらくぶりで会えるものと楽しみにしていた瀬口さんの顔が見えない。倉田さんに尋ねると、二月中旬（十六日）、持病の心不全が急に悪化して、一時は、お子さんたちを柳下村塾に託するよう、遺言をするほどの状態だったが、さいわい今は快方に向かっているのだと言う。驚いて帰るとすぐ、病院にお見舞した。

ところが、奥さんが出て来られて、昨夜また突然脳血詮を起こし、奇蹟的に約四十分で意識は回復、半身の麻痺もすっかりとれはしたが、当分は面会謝絶とのこと。数分間でも会って話すことのできたのは、それから何週間かあとであった。

その後恢復は順調で、五月半ばには退院、自宅療養を許されたものの、ぶり返しを気遣って、訪問の折を得たのは、もう十一月の初旬だった。そのときは起きて一時間余り、時にこころもち苦しそうではあっても、よもやまの話のしっかりした声は、いつもと少しも変らなかった。奥さんの心づくしのぜんざいも、私などよりずっとよく食べた。前日にはゆっくりと歩き、タクシーに乗って登校、二時間ほど研究室に坐っておられたとのこと、この分ならば、春ごろにはまた仕事にもかかれることと、喜んで帰った。

ところが、年が明けて一月の三日、奥さんに電話して、病状のよくないことを聞いた。そうして、翌四日の夜七時半には、余りに早く、悲しい報せを受けた。あとで伺うと、元日、二日は、正月を一緒にしたいという瀬口さんの望みで、熊本の田舎から出て来られた御両親や三人のお子さんたちと、よく食べ、よく遊んで楽しく過ごしたが、四日午後五時半ちょっと呼吸困難を起した。正月中も親切に行く先を明らかにしてくれていた九大の医者は、すぐに来て心電に行く先を明らかにしてくれていた九大の医者は、すぐに来て心電

図をとり、急なことはないといって帰った。しかし六時半、奥さんがすぐ側の通りまで出かけて帰ってくると、すでに息絶えていたのだという。苦痛も不安もまったくなかった。痩せてもいず、いつもにもまして静かな、美しい顔だった。

三日朝郷里に帰られたばかりの御父上も、いましがたお着きになられたのであろう。まだ蔽いもかけてない枕許に坐って、生きた人にもの言うように高い声で、「立派に生きぬいた」その息子に語りかけておられた。

（なぜもっと早く駈けつけて、最後の挨拶をかわさなかったか、——私は切に過度の遠慮を悔いた。取りかわす言葉はもとより、どんな思いも眼差しも、いま私たちの間に露わとなったこの隔たりを埋めることはできぬであろう。私たち人間が「死を超えての連帯」を口にするとき、そこにはいつも陰湿な「異端審問」の陥穽、ついには連合赤軍派の惨劇にまでのめり込む危険が、私たちを待ち伏せているであろう。しかし、この事実を堅く踏まえたうえで私はなお、「とても冷いところのある人だ」という、最も親しい者のいつかの非難を想い起こした。最後の土壇場でイエスを見棄てたペテロ、——それが、そしてただそれだけが、ついの私でないかどうか？）

二

高い背丈も、顔かたちも、瀬口さんそっくりなお父上の話によると、並はずれて親思いだった「常民」は、文字どおりの独りっ子のうえ、なぜか生まれつきの心不全だった。小学校五年生の駈け足のとき、始めてそれと気づいた。診察した医者はひそかに、せいぜい十八才までしか持つまいと言ったとのこと。それが四十四才の今日まで人一倍の活動に耐えたのは、生来の明るい気立てのうえに看護婦の資格をもつ奥さんのおかげを別にすれば、主として瀬口さん自身の気力によることであろう。うかつな私は、いつかの岡山の集まりで、ごくゆっくりと歩いていたにもかかわらず、途中立ちどまって呼吸を整えられたのを見て、驚き案じたのちも、それほどのこととは思わなかった。どんな時にも、けっしていきり立ったり、大声でどなったりしない、その奥に微笑を湛えるような話しぶりも、ただ天性の優しさによるものとのみ思って過ごした。そのことに間違いはないとしても、それが病苦との闘いのなかで鍛えられた忍耐の賜物だったこともまた、それにもまして確かであろう。《RADIX》誌第2・3号の平明精確、執筆後三年を経た今日いよいよ新鮮な、瀬口さんの文章「闘いにとって大学とは何か——モンタージュ九大闘争」は、その何よりの証拠である。

何よりも学生たちの内ゲバに心を痛め、金原さんと私の考えの基本に、ある重大な喰い違いのあることを見てとって、徹底的な討論を勧めてくれたりしたが、私自身、瀬口さんと激しい議論をしたことはついぞなかった。ただ一度、集まりの時刻まで兼六公園を歩きながら、権力者・管理者たちの翻りの可能性——「ヒットラーといえども一人の人間であって、けっして悪魔そのものではない」という、彼に抗して銃をとったカール・バルトその人の言葉——をめぐって、互いの意見を述べあっただけだった。「反戦ということだけは貫きたい」——ただひと言そういった静かな口調が、今もはっきりと耳の底に残っている。

三

「学校をやめ、かねて父の求めておいてくれた福岡の土地に、柳下村塾のような塾を開きたい。生活のうえでもむしろその方が楽だろうれども、ただ退くわけにはいかない」——機動隊導入後、時とともに孤立を深めるなかで瀬口さんはそう言い、「授業」その他にさまざまな工夫を凝らしておられた。今度快くなられたらと、その日を楽しみにしていた私たちの望みも、いまは虚しくなった。

通夜の席には、「現職教官」ということで、さすがに教養部数学教室の「同僚」たちも顔を見せていたが、葬儀は熊本県飽記郡天明町奥古閑の郷里でいとなむことになって、翌五日午前十一時、私たちは茶山のお宅の前で、出棺を見送った。納棺の前、「お父さん、起きてちょうだい、お父さん、起きてちょうだい！」——そう、子供のように言って、奥さんは泣いた。

六日夜、倉田さんからの報せでは、御家は熊本からバスで四、五十分の海に近く、その名のように閑静な田舎だが、こちらから伝習館関係の二十余名ほか、べ平連、学生たちなど六十名ほども馳せつけて、瀬口さんとの別れを惜しんだとのこと。御母上は二百前後の高血圧でお寝みだったが、御父上は、大学闘争以来の情況、そのなかでの瀬口さんの振舞いを詳しく尋ねて、「やはりかねて自分の察していたとおりだ」と大へん喜ばれた。今後は必要ならば、集会の場所その他にこの家を使ってほしいと、申し出て下さったという。

瀬口さんの御冥福、御遺族の平安を心から御祈りして、この拙文の筆を擱く。

〔付記〕

瀬口さんの奥さんと三人のお子さん（高校と中学の女の子と小学校四年の男の子）は、続いて、福岡市西区七隈茶山団地八三〔TEL 八七一—六六六七〕の御家に住まれるはずである。なお、瀬口さんは、べ平連、伝習館のほか「数学教育協議会」の熱心なメンバーでもあった。それらを含めて、倉田さんが別に一文を書いて下さるはずであるが、何ぶんにも井上さんのこともあり、伝習館裁判その他、ここ当分ことに多忙を極めているため、僭越ながら、同氏にかわって、私の知るかぎりの瀬口さんを、この『通信』に書かせて頂いた。付記して大方のお恕しを乞う次第である。

——一九七四年一月二九日——